

対人両価感情に関する実証的一研究

堤 雅 雄*

Masao TSUTSUMI

An experiential study on the interpersonal ambivalence.

[キーワード：ふれあい、両価性、接近一回避葛藤、対人不安、青年期]

key words: ambivalence, approach-avoidance conflict, social anxiety, adolescence.

人間の心理が単純に割り切れるものでなく、時に相矛盾する精神活動を併せ持つことがあるのは、我々の日常経験、とりわけ対人関係を振り返れば自明であろう。人が孤独を恐れ、他者を求めるのはごく自然な心情であるが、その一方でなぜか他者を避け、引きこもろうともする(堤, 1995)。かつてショーペンハウアー(1773)が「山あらしジレンマ」として描いた接近・回避葛藤はその典型であり、人が同一の対象に対して肯定、否定の両価的感情を有することがあるとの認識は、広く臨床に携わる者にとっての要諦でもある。

他者に対する両価性(ambivalence)は次の3つの位相において成立可能である。まず、自己に対する我の両価性。自己に対する嫌悪と自己愛の併存は境界例をもちだすまでもなく、特に青年期では一般的、かつ顕著である(Beebe, 1988)。次に親密な他者(汝)に対する両価性。愛する者に対する愛と憎しみの二重の感情は永遠の文学的テーマである。そして他者一般(彼ら)に対する両価性。初対面の他者との出会いや、公的な場面での自己提示などでは、多くの人が緊張や羞恥を経験するが、そこにも他者に対する両価的感情が内在する(Asendorpf, 1989)。

近年、ボールビィに端を発する愛着理論において、密接な関係にある他者に対する愛と憎しみの両価的愛着タイプは、乳児期の母子関係から成人期の異性関係に至るまで、生涯を通して普遍であるという議論が盛んである(Bowlby, 1973, 1977, Bretherton, 1985, Simpson, Rholes & Phillips, 1996)。

現代の若者たちの、おとなから見れば一見不可解な対人行動のスタイルに対しても、その基底に他者に対する

接近-回避葛藤を見る視点からの議論がある。一時期新聞紙上で「ふれあい恐怖症」なる話題が喧伝されたのもその一例である。ふれあい恐怖症とは、授業やクラブ活動などの浅い付き合いは無難にこなすものの、その後の雑談や会食などの深い付き合いになると不安感が高まり、逃げ出してしまうというものである(朝日新聞, 1989)。

彼らの行動の根底に、果たしてそのような相反する志向性が実際に存在するのだろうか。残念ながらこれに関する実証的検証は意外に少ない。例えば最近の対人不安心性に関する国内の幾つかの研究論文(堀井・卯月・小川, 1994, 堀井・小川, 1995, 岡田・永井, 1990, 内田, 1995)でも、他者に対する両価性についての言及には乏しい。

本研究では大学生を対象に、人と人のふれあいに対する肯定、否定の二重の志向性の存在を検証するとともに、いまだおとなになれない後期青年期の、他者に対する微妙で複雑な心理の分析を試みる。

予備調査

目 的

現代の大学生が、人と人の「ふれあい」についてどのような感情を持っているか、どのような状況で人間関係に肯定的、あるいは否定的感情を生じるかについて、自由な形式で記述してもらう。

方 法

日時：1997年7月

被験者：国立S大学教育学部、人格心理学受講生60名(男子16名、女子44名)。

*島根大学教育学部心理学研究室

表 1. 「ふれあい」に対する連想語反応 (N=60)

カテゴリー	連 想 語	反応頻度
いつくしみの気持ち	暖かい, やさしい, 思いやり, 等	62
身体的接触	握手, 抱擁, さわりあい, 等	39
友人	友達, 友人, 仲間, 等	30
交遊関係	助け合い, 仲がよい, 交流, 等	30
愛情	愛情, 愛, 恋人, 等	30
家族	家族, 親子, 兄弟, 等	22
精神的相互交流	スキンシップ, コミュニケーション等	22
わずらわしさ	息苦しさ, 緊張, 悲しみ, 等	15
その他, 少数反応		

質問紙：人間関係に関する意識を調査するというこ
で、以下の事項からなる質問紙に、匿名での自由記述を
求める。質問は以下の通り。

1. 連想語調査：「ふれあい」という言葉からどのよう
なことを連想しますか。思い浮かぶだけ書いてください。
2. 肯定的, 否定的人間関係の経験についての自由記述：
以下の6状況について問う。

- ① 人間関係において、あなたが最も安心でき、居心
地良いと感じるのはどういう状況ですか。
- ② 他者との関わり合いの中で、救われたと感じるの
はどういう場面ですか。
- ③ どういう時、どういう場面で、ひとりしていると安
らぎますか。
- ④ 他者との関わり合いの中で緊張を感じるのは、ど
ういう場面ですか。
- ⑤ 人づきあいが、わずらわしいと感じるのはどうい
う時ですか。
- ⑥ どういう時、どういう場面で、ひとりしているとつ
らいと感じますか。

質問①から⑥は、対人関係に対する両価性の有無を見
出すために、それぞれ①と④（安心、居心地良い vs 緊
張）②と⑤（救われた vs わずらわしい）、③と⑥（ひと
りであることの安らぎ vs つらさ）と、相反する感情経
験について質問している。

結 果

連想語の反応を整理して表1に、状況の自由記述を同
様に表2に示す。また、状況③（ひとりであることの安
らぎ）と⑥（ひとりであることのつらさ）に対して、ほ
ぼ同様の場面を記述した被験者、すなわち孤独に対する
両価的感情を有しているであろうと思われる反応を行な
った被験者の割合を表3に示す。

考 察

「ふれあい」の連想語：「ふれあい」という言葉から連

想することは、その大半があたたかい、やさしい、愛情
などの、親しい者との肯定的感情経験であるが、その一
方で否定的気分、例えば息苦しさ、緊張、悲しみ等の表
現も15例見られる。日本語の「ふれあい」という言葉が、
それ自体かなり肯定的ニュアンスを有していると考えら
れるにもかかわらず、否定的連想語がこれだけ出たのは
興味深いことである。

肯定的、否定的人間関係に関する自由記述：①の安心
でき、居心地良い状況については、女子の半数が親密な
関係において、という内容であるのに対し、男子のほぼ
半数が「自分が自然でいられるとき」という表現であっ
た。両者の示唆する状況にそれほどの違いはないかもし
れないが、その表現において男子が自己の有り様につ
いての記述であるのに対し、女子のそれが他者との関係に
ついて述べているところが対照的である。④の、緊張を
感じる状況についての質問に対しては、特に男子の反応
数が高く、一人平均の頻度が女子の0.5例強に対し、男子
は3例近くに達している。この男子の対人的「緊張」に
対する反応の多さは、他の「救われた」、「安らぎ」、「わ
ずらわしい」、「つらい」といった項目に比してもいえる。
対人緊張は男子に特に顕著であることが表れている。し
かもその過半が「初対面、もしくは目上の人と話すとき」
に集中している。相対的に、男子は自己志向的、かつ他
者回避的、女子は他者志向的傾向が伺われる。この差異
は以下の質問に対してもほぼ同様であった。

②の「救われた」と感じるのは、友人にというのが女
子に多いが、男子は少ない。男子は「理解された時」と
か「時間を共有した時」、あるいは「そばにいてくれるだ
けで」という間接表現が多い。一方⑤の「わずらわしい」
と感じるのは、言いたいことが言えないとき、体調不良、
忙しいときなど、相手によるというより、自己の状態に
起因する状況の記述が大半である。

③の、ひとりであることの「安らぎ」については、孤
独を楽しむという積極的な反応は僅少で、逆に他人にわ
ずらわされたくないという防衛的な内容が多く、⑤に対

表2. 肯定的, 否定的関係についての自由記述

①人間関係において、あなたが最も安心でき、居心地良
いを感じるのはどういう状況ですか。

回 答	頻 度		計
	男	女	
・家族, 友人, 恋人など信頼関係の確認できる状況	2	22	24
・自分が自然でいられるとき	11	4	15
・気心知れた人といるとき	3	6	9
・気持ちがそこにあるとき (守られているとき)	3	1	4
・精神的圧迫感がないとき	2	1	3
・当たり障りのない状況	1	0	1
・1対1で話をしているとき	0	1	1
・なし	1	0	1
・その他	0	2	2
計	23	37	60

②他者との関り合いの中で救われたと感じるのは、ど
ういう場面ですか。

回 答	頻 度		計
	男	女	
・友人が自分の悩み・苦境を救ってくれたとき	1	25	26
・他者から理解されたとき	8	11	19
・時間を共有したとき	3	1	4
・声をかけてくれたとき	0	3	3
・そばにいてくれる人がいたとき	2	1	3
・自分に対する好意が感じられたとき	0	2	2
・なし	1	2	3
・その他	1	3	4
計	16	48	64

③どういとき、どうい場面で、ひとりであるとな
らを感じますか。

回 答	頻 度		計
	男	女	
・身体, 体力的に余裕がないとき	8	14	22
・プライベートな時間	1	17	18
・個人的な悩み事があるとき	2	13	15
・他者と関わるのが嫌なとき	2	2	4
・緊張から解放されたとき	1	1	2
・何もしなくても責任が問われないとき	1	0	1
・その他	0	2	2
計	15	49	64

する反応と通じるところがある。⑥のひとりであること
の「つらさ」についても又③と同様に、自己の苦境に関
する記述が多い。③と⑥という反義的な項目間に、似通
った記述が現れたのは、他者に対する両価感情の存在を
示していると考えられる。同じ被験者で、③と⑥の両項
目に対し同様な状況を記述したのは、男子3名, 女子7
名, 計10名 (全体の16.7%) であった (表3)。

④他者との関り合いの中で緊張を感じるの、どうい
う場面ですか。

回 答	頻 度		計
	男	女	
・初対面, もしくは目上の人と話をするとき	24	6	30
・他者が中心となっているとき	6	5	11
・自分の遺志をはっきりと表に出さなければならない とき	7	1	8
・避けている人と話をするとき	5	1	6
・過剰な評価をされたとき	2	2	4
・言ってはならない事を言ったり, けんかをした後	1	3	4
・1対1で話をしているとき	0	1	1
・話題がなく沈黙したとき	0	1	1
・その他	1	3	4
計	46	24	70

⑤人づきあいが、わずらわしいと感じるのはどうい
うときですか。

回 答	頻 度		計
	男	女	
・言いたいことも言えず, 他者を気遣うとき	1	15	16
・体調不良のとき	3	10	13
・忙しいとき	2	10	12
・相手が無視したり, 自己表現がないとき	4	1	5
・自分の思いが伝わらないとき	0	3	3
・価値観の違いを感じたとき	0	2	2
・異性と話をするとき	1	0	1
・その他	6	1	7
計	18	42	60

⑥どういとき、どうい場面で、ひとりであるとな
らを感じますか。

回 答	頻 度		計
	男	女	
・悩み, 不安を抱えているとき	3	16	19
・さびしいとき	2	15	17
・誰かに会いたいとき	3	13	16
・他人の中にいるとき	2	3	5
・むなしさを感じるとき	1	3	4
・ずっとひとりだったとき	1	3	4
・なし	2	0	2
・その他	1	2	3
計	15	55	70

表3, 質問③, ⑥に対し、ほぼ同様の状況を記述した被
験者の割合

	人数	(N)	割合(%)
男子	3	(16)	18.8
女子	7	(44)	15.9
計	10	(60)	16.7

表4 対人関係意識尺度の因子分析

質問 No.	質問内容	※	バリマックス回転後の因子負荷量(小数第 3位四捨五入)				評定値平均 (SD)
			第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	
☆23,	友達がいないのは寂しいが、かといって、深いつきあいをするのはわずらわしい。	新	.62				5.29(1.57)
☆20,	自分の言いたいことを率直に言い合える仲を、時にわずらわしいと思うことがある。	①	.62				5.48(1.52)
☆2,	友人はほしいと思うが、食事をする程度の軽いつきあいだけのほうが安心できる。	新	.51				5.61(1.34)
5,	人から忠告を受けたとき、わずらわしいというより、助けられたと感じるほうである。	③	.48		(.34)		3.98(1.31)
☆12,	親からの期待に対して、プレッシャーを感じる。	④	.46				4.71(1.87)
7,	人が自分をフォローしてくれたとき、素直に有り難いと思える。	②	.44				5.81(1.26)
19,	世代の違う人と話をすることは、苦にならない。	⑤	.42				4.75(1.59)
☆14,	初対面の人と話をするとき、いつも緊張する。	④		.72			3.46(1.76)
☆22,	他人に気を使うほうなので、人付き合いがわずらわしいと思う。	⑤	(.30)	.61			4.15(1.45)
☆15,	自分の意見を大勢の前で発表するとき、緊張する。	④		.48			2.52(1.49)
☆4,	ずっと人といると、うっとおしきを感じる。	⑤	(.35)	.44			3.51(1.51)
☆3,	大勢の中にいるときにも、ふとさみしくなることがある。	⑥		.43			3.73(1.68)
16,	忙しいとき、家族から励まされると嬉しいと感じる。	②			-.65		5.35(1.39)
18,	友人関係で悩んでいるときでも、家族と一緒にいると安らぐ。	①			-.61		4.31(1.60)
1,	ひとりで思い悩むことがあるとき、誰かがそばにいてくれるだけで救われたと思う。	②			-.54	(.32)	4.76(1.69)
21,	自己嫌悪に陥ったときには、ひとりでいると余計にそれを痛感する。	⑥			-.52		5.03(1.62)
24,	自分に悩み事があるときでも、気心知れた人とおしゃべりをすると安心できるほうだ。	①			-.48		5.24(1.48)
13,	笑いあえる友人がそばにいないとつらい。	①				.54	4.78(1.71)
9,	ひとりでいるのはつらいと感じるほうだ。	⑥				.53	3.68(1.77)
☆6,	親しい友人との会話であっても、途切れたときの沈黙がこわい。	④				-.50	5.10(1.71)
8,	友人が自分にどんなことにでも同調を示すのは、やっぱり嬉しい。	②				(.30)	4.19(1.57)
☆10,	知人というよりひとりでいるほうが、気分転換がはかれるほうだ。	③		(.33)			4.20(1.46)
☆11,	個人的な悩みがあるときには、ひとりでいるほうが楽だ。	③			(-.31)	(.31)	4.04(1.73)
☆17,	自分が忙しいときには、他人と関わることがわずらわしいと感じる。	⑤	(.37)	(.37)			3.21(1.35)
		固有値	2.47	2.17	2.04	1.70	
		二乗和 寄与率	(.10)	(.09)	(.09)	(.07)	

※：予備調査における項目区分

☆：逆転項目

本 調 査

目 的

他者に対する両価感情が果たして現代の若者に一般に存在するのか。存在するとすればどの程度か。予備調査の結果をもとに、対人関係に関する肯定的かつ、(あるいは)否定的意識の程度を調査するための「対人関係意識尺度」を構成し、実際に測定して、その因子構造を解明する。

方 法

日時：1997年10月。

被験者：S大学青年心理学受講生99名（男子39名，女子60名）。

質問紙：予備調査の、肯定的、否定的人間関係に関する記述（①～⑥）から、多数の被験者が挙げた対人関係の状況を抽出し、問題と思われる状況、あるいは両価性の認められる状況の表現としてふさわしいよう若干の修正を加えながら、22の質問項目を作成した（表2参照）。これに加えて、ふれあいに対する両価性を直接示す2項目を作り、計24項目の「対人意識尺度」を構成した上で、全くそう思わない(1)から非常にそう思う(7)までの7段階で評定を求めた。

結 果

対人意識尺度24項目の反応を因子分析した結果を表4に示す。直交バリマックス回転を施した上で、4因子を抽出した。各項目の評定平均値も同表に併記しておく。

第1因子に分類された7項目は、項目no.23と2が「ふれあい恐怖症」的状態を表すために作られた項目であり、no.20, 5, 12なども両面的表現を含む内容である。このように第1因子は、人間関係に対する両価感情を示す項目が因子負荷量の上位を占めており、「対人関係に対する両価的感情」因子と解釈する。評定平均値はいずれの項目も(no.23, 20, 2, 12は逆転項目)両価的ではあるが最終的には人間関係に肯定的な態度を示す方向で、かなり高

い値を示している。

第2因子は全ての項目が予備調査の④, ⑤, ⑥, 即ち対人場面での否定的経験を示しており、「対人関係に対する否定的感情」因子と名付ける。評定平均値はほぼ中位ないしそれ以下、即ちやや肯定的な方向（全て逆転項目）にある。

第3因子に分類された5項目は、いずれも人間関係によって救われた経験、あるいは逆にひとりであることのつらさを示す内容で、他者希求性あるいは「対人関係に対する肯定的感情」因子と会される。評定平均値は全般に高い方であった。

第4因子は一人であることのつらさや不安を表す項目群であり、「孤独に対する否定的感情」因子と名付ける。なお残りの項目no.10, 11, 17はいずれもひとりであることの安らぎを表わす項目であるが、因子負荷量は全て低かった。性差については、サンプル数のアンバランスが大きいので議論の対象から省く。

次に、各因子相互の相関行列を因子得点をもとに算出し、表5に示す。4因子相互の相関は最大でも.085と極めて小さく、各因子の独立性は非常に高かった。

考 察

因子分析の結果は、「対人意識尺度」総体が、人間関係に対する肯定、否定、あるいは両価的態度を表す内容として、被験者に受け止められていたことを示している。また、これに対する評定は総じて、他者に対する肯定的な態度、即ち他者回避の方向より他者希求の方向にやや傾いていた。また、4因子相互の相関は全て極めて小さく、統計的には無相関であった。つまり、意味的に対照的な第2因子の対人関係に対する否定的感情と、第3因子の肯定的感情、及び第4因子の孤独に対する否定的感情とは互いに独立であり、両者の併存は充分可能であることが確認された。

予備調査と本調査の両結果を総合して考えてみると、青年期後期にあたる大学生達は、児童期のように単に孤独を恐れ他者を希求するだけでなく、他者を拒否し自己を志向する傾向も矛盾無く併せ持つことが可能となってい

表5, 対人関係意識尺度の各因子相互の相関行列

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子 (対人関係に対する両価的感情)	1.000			
第2因子 (対人関係に対する否定的感情)	.0850	1.000		
第3因子 (対人関係に対する肯定的感情)	-.0654	.0031	1.000	
第4因子 (孤独に対する否定的感情)	.0188	-.0266	-.0749	1.000

るのが確認できた。ただこの2つの志向性の相対的強さは、拮抗しているというより、肯定的方向がやや優勢であり、青年期も後期に至ると、対人的葛藤状態から脱しつつあることが窺われた。

参考文献

- 朝日新聞(1989) 大学生に増えています「ふれあい恐怖症」, 1989年5月27日。
- Asendorrph(1989) Shyness as a final common pathway for two different kind of inhibition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57(3), 481-492.
- Beebe, J.(1988) Primary ambivalence toward the self : its nature and treatment. Schwartz-Salant, N. et al. (Ed), *The borderline personality in analysis.*, Chiron Publication.
- Bowlby, J. (1973) *Attachment and loss: Volume2. Separation : Anxiety and anger.* New York : Basic Books.
- Bowlby, J. (1977) The making and breaking of affectional bonds, *British Journal of Psychiatry*, 130, 201-210.
- Bretherton, I. (1985) Attachment theory : Retrospect and prospect. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 3-35.
- Clark-Lempers, D. S., Lempers, J. D. & Ho, C. (1991) Early, middle, and late adolescents' perceptions of their relationships with significant others. *Journal of Adolescent Research*, 6(3), 296-315.
- 堀井俊章・小川捷之 (1997) 青年期における対人意識の発達的变化. 心理臨床研究, 14(4), 448-455.
- 堀井俊章・卯月研二・小川捷之 (1995) 青年期の対人不安意識に関する研究. 心理臨床研究, 13(2), 215-221.
- 岡田努・永井徹 (1990) 青年期の自己評価と対人恐怖心性との関連. 心理学研究, 60(6), 386-389.
- ショーペンハウアー (1973), 秋山英夫訳, 「比喩, たとえ話, 寓話」, 哲学小品集5 (ショーペンハウアー全集 14).
- 堤雅雄 (1995) 矛盾する心, 晃洋書房.
- 内田裕之 (1995) 大学生の世間意識と対人恐怖的心性との関連. 心理臨床研究, 13(1), 75-84.